
暇な世界にさようなら

歯ぐき血まみれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暇な世界にさようなら

【Nコード】

N7753Y

【作者名】

歯ぐき血まみれ

【あらすじ】

あー、最近することないよなー学校行っても授業とかまじつまんねえし。この世界は暇すぎる。ゆいいつの楽しみといえは家でやるオンラインネットゲームくらいだよまったく。はあ、いっそのこと別の世界に神様が送り出してくれないかなあ。若干キャラがチート性能だったりするのでチート性能とかまじありえないわーとか思う人には向いてないかもです。作者はまだ未熟者ですので誤字脱字があったら指摘してくれると嬉しいですよ。

オレの日常（前書き）

最初はらへんは主人公の日常回

オレの日常

「あーさむい。なんかなんねーかなマジで？」

隣でオレの友人がそんなことをいう

「なんとかできたらしてるって・・・」

実際なんとかしてほしいよなこの寒さ

いま携帯の天気予報的には5 らしい

コイツがさむがるのも無理はない。

「そーいやさーもうすぐテストだよなマジで」

そーいやそんなこともあつたな

まあ知ったところで勉強なんかするわけがないが

「俺全っ然勉強してないからこんどやべーかも的な？」

へえ、こいつ意外に勉強するタイプなのか。

こいつは守山達也 オレこと凜道 蛭の同級生。去年高校に入学した時に前の席にいたのがコイツだ。

その時からコイツとはつるんでるからもう1年くらいの付き合いになるのか

「じゃー早く帰って勉強したほうがいいんじゃないのか？」

とりあえずテストが近いならオレとだったらしゃべってる時間なんてないはずだし

そう思ってオレはそう提案する。

「そうだなあー、んじゃ帰るわ。また明日なー」

よし、オレも早く家に帰って暖房の聞いた暖かい部屋でネットゲでもするか。

そついいながら特に急ぐまでもなくだらだらと家に帰る蛭であった。

「さむっ」

自分の家についてまず最初に口から洩れた言葉がそんなものだった。

いやだつて4 だよ？外より寒いっておかしくね？

オレは制服を適当にハンガーにかけて暖房を入れつつPCの電源を入れる。

ちなみにここはもうわかってると思うがオレの家である。

母親は毎日深夜に帰ってくるか仕事が遅過ぎて仕事場で寝泊まりするしあんま家にいないのが現状だ

親父はいない。事情はしらん。

まあそこらへんは母さんが話してくれる時をまとうとは思っ

別に知りたいわけでもないしな

そんなことを考えてる間に室温もそこそこあがって暖かくなってきている。

さて、と。

そろそろINするか。

そう思いつつオレはインターネットをつけてオレがはまっているネットゲームーセカンドワールドを起動する。

スタート画面。

そして始まりの街

このセカンドワールドは3Dのアクション系だ。

いろいろな職業があり、レベルアップによってもらえるポイントをいろんなステータスにふって自分専用のキャラクターをつくれる。

ちなみにオレのキャラ名はホタリンである。

昔言われてたあだ名を使ってみた。

もっとマシな名前にしてよって？

ほっとけ

さーていつものメンバーはいないかなあ

そう思い街をぶらぶら歩いてたら後ろから人影が近ずいてくる

「やあ」

そして挨拶の声。

振り向く。

白いニット帽 服も同じく白系で統一されたディスプレイズ そして金髪

間違いない

「よう、マカロニさん。他のみんなは？」

この友だちの名前はマカロニ

日常的に狩りや素材集めを共にする信用できる仲間である。(キリッ

それにマカロニさんの物理範囲攻撃ははんぱない。

ザコモンスターの軍隊なら一撃で壊滅させられる

一部では一騎当千のマカロニとかいわれてるらしい

「まだ着てないみたいだね」

さわやかな笑顔でそう返事される

「んじゃ適当にクエストボードでもみとこっぜ」

「そうだね」

そんな会話をしていたら

「もおあんたたち着てたの？早いわね」

そんな声が聞こえてくる。

ちらっ

全身黒い龍騎士が着るような鎧に身をつつみ、頭にはティアラのよ
うなものをのせている。

そして金髪のパニーテル

「なんだコロネか」

「なんだって何よ!」

ちなみにこいつが着てる装備 集めるの大変だったなあ

ていつかわざわざ装備を確認なんかしなくても声でわかるんだけどね

こいつはコロネ。

コロネもオレのギルドメンバーの一人で職業はアサシン。相手の急所を突いて即死させたり相手から素材を盗んだりするのが主な戦闘スタイルだ。

てゆうか、普通に強い。

「んで、あんたたちなにしてたのよ」

「ああ、暇だから何か適当にクエストでもいこうかになってね」

「なるほどね」

2人が会話してる間オレはクエストボードに注目していた。

このクエストボードといわれる板からは様々なクエストを受けることができる。

まあようはどこにいくか決めるところみたいなの？

「うーん、素材集めはめんどくさいから討伐系にしてくんね？」

「そうだねえ・・・おっと」

マカロニさんが何かにきずいたようだ。

オレもマカロニさんが見ている方向をみる。

そこにはよく知ったヤツラがいた

「お、アルスとリサじゃん」

「そうみたいだね」

「お、こんにちわー。ちょうどいまどこいこうか迷ってたところだったんだぜ」

「よー」

「.....」

元気な挨拶を返してくれたのはリサ

なにかと綺麗な聖騎士装備に身をつつみ、背中には長くも短くもな
い剣を二本収納している

本人いわくかなりのレアアイテムでちよーかるいよ！とのこと

みずいろの髪をツインテールに結んであり、かなり幼く見える

そして何もいわず腕を振ってあいさつしたのがアルス。

いわずもかな超無口である。

だがしかし彼の防御力は理解不能なレベルまで達している。

全身西洋の鎧を装備しており、外見からどんな人間なのかあまりわ
からない

っていうか全く分からない

頭装備も鎧なので顔もわからないという謎極まりないヤツだ

一部の間ではびくともしない絶対的な防御力から世界の境界線
ア
ー
スライン とか呼ばれてるらしい

なんとも大層な二つ名だが大袈裟な表現にはならないところがまた
すごい

ってか怖いよ

さて、これでそろったなギルドメンバー

「ところでどっかいきたいところ……」

「ねえ知ってる？」

オレが言い終わる前にリサが乱入

「この前突然北の森の奥地に空まで続く塔が出現したらしいよ！」

なんだそれ、おもしろそうだな

「え、ほんと？おもしろそうね」

「そうだね、それでその情報はどこから？」

マカロニさんの質問にたいし

「私の友だちが森で見かけたらしいー ほら、写真！」
と答える。

なるほど、証拠付きつてワケか。ならもう決まりだな

「んじゃ、その塔ってやつにいじつぜ」

というオレの提案に

「そうだね」

とマカロニさんと

「わかったわ」

ころねが返事し

「.....」

アルスが無言の同意

「おっけー！じゃー私が案内するよ！」

そうして、とりあえずオレたちは好奇心とかそんなもんで塔に向かった。

でも今にして思えばなんで不思議に思わなかったのだろうか

アップデートの報告もなしに出現した塔のことを。

オレの日常（後書き）

誤字脱字や感想など報告してくれるとありがたいです。

終わる日常(前書き)

今回は戦闘かいてみましたー的な

終わる日常

「ん、気がついたようね」

目を開ける

「なんだコロネか」

「なんだってなによ!」

ベシッ

「んで、ここはどこなんだ?」

「知らないわよ!」

ベシッ

あれ?

おかしい。

自分の服をみる。

魔法使いが着るようなベタなローブ

手のひらを握り、開く

オレはPC画面で激しい戦闘を楽しんでいたはずである

なのになんだ

この、自分そのものがゲームにはいつちやっただよ的な展開

「っていつか、ここ、ゲームの中なのか？それにしても見たことない土地だが」

周りを見渡す。森である。

北の森に見えなくはないが周りに生えている木の種類が全く違う

「だから知らないわよ！」

べしっ！

「さっきからいてえよ！なんで事あるごとに叩いてんだよオイ！」

「まったくどうなってるのよ……」

華麗にスルーが決まる

だがたしかに異常事態だ。

とりあえずその木に腰掛けながら意識が飛ぶ前のことを思い出す

あのあとオレら五人は北の森にあるタワーへと足を運んだ。

北の森はそこまで敵も強くなく、ほぼ無傷で進むことができた

そして塔が見え、息を吸い込み、深呼吸して中に入った

あ、まだ説明してなかったな。オレは職業魔法使い

別に何かに特化してるわけじゃない。

全ての魔法を万弁なく最強レベルまで強化している。

オールマイティってことかな？

だが何回も言うように特化してるわけじゃない

結界魔法の防御力がそこそこ強いレベルだが防御特化型のアルスと比べたら余裕で負ける

それにオレたちのPTはそれなりに廃人スペックな気もする

このゲーム内では名が結構知れ渡っている

ような気もしなくもないような気がする…

「モンスターがないわね……」

と、ここでコロネの発言に思考と中断させられた

「かえって不気味だよね」

コロネの問いにマカロニさんが笑顔で答える

……絶対不気味がってないだろ

まあたしかにおかしいな

「おばけとかでたりしてー」

と、リサがいたずらをする子供のような表情でいう

「そ、そそそそそ、そんなのいるわけないじゃない!」

「コロネ、お前もしかして怖いのか?」

あまりのわかりやすさについ意地悪をしたくなつたのでした

「ち、ちがうし!こわくないし!っていうか速く歩きなさいよ!ばか!」

「ははは、大丈夫だよ ほら、もうすぐ頂上です」

そんな会話をしながら進んでいるといつのまにか頂上らしき場所にてた

正面に巨大な扉がある

うわー、あやしー

「なんかかいてあるよー!」

リサがはしって扉に書いてある文字を読む……

「うーん……漢字難しいな……とりあえず、てい！」

と、文字を読むのを1文字目で放棄し、扉を押す

「ってオイ！だめだろ！ていうかなにがとりあえずだよ！」

オレは我を忘れて思わず突っ込んでしまった

のだが

「うわ、眩しい！」

扉の開いた先から今日烈な輝きが放たれて、オレのツツコミはスル
ーされた。

輝きがだんだん薄くなり、光の中に誰かが立っているのが確認できる

そして光がきえ、中の部屋に入る。

そしてみわたす。うわっ、ひろ。

なんていうか……昔の神殿みたいな作りで若干暗いけど別に困るほどでもない

そして一番奥にまた扉

その扉の前に立つ一人の老人

NPCか？

「お主ら、新しい世界へ、行ってみたいか？」

……え？

目の前のNPCと思われるヤツがそんなことをいった

オレは振り向いてマカロニさんに尋ねる

「どういうことだ？」

「新しい世界……新しいダンジョンでも追加されたとかじゃない？」

「なるほど、ありえるわね」

「よくわかんないけど、いっつー！」

ほんとテキトーだなーおい

まあ新しいダンジョンか……悪くない 悪くないぜ！

オレは老人に振りかえり

「おう！行かせてくれ！」そう叫んだ

「ほう、おもしろい。ならばコイツをたおしたら連れて行ってやる。

」

老人の目の前に超巨大な魔法陣が展開される

そしてそこからでてきたのは……

体長20メートルは余裕である前足の浮いている二本だちの漆黒の龍

……20メートル!?

でっか

なるほど……こいつを討伐すればいいのか

龍と対峙する。

オレと龍の距離10メートル。

まずは様子見だな

「ゆけ!」

老人がそう叫んだ。

龍の口になにやら炎のようなものが見え隠れしている。

……ブレスか!

その瞬間、龍の口からとてつもない勢いで炎が噴射される。

とりあえず、様子見として炎体制の着いた結界を一瞬にして2重に
はり、その結界に防御力上昇の補助魔法をかける

こんだけ硬くすればビームくらいよゆう……

って

は？

おかしい

オレの結界は1枚でロケットミサイルは防ぎきるくらいの強度があるはず

なのに

一瞬にして結界が消えうせオレに直撃……

するかと思ったその瞬間

アルスがオレとブレスの間に回り込み彼の持つ盾で防ぐ

炸裂音

そして爆風

さすがアルスだ。オレの結界をも消しとばす威力をもろともせず
受け止めやがった！

アルスがこちらに腕を突き出して親指を突き出している

攻撃はまかせろ……。そういつてるように見える

つつかなにあの余裕。

「盗賊スキル 影分身！」

うしろで技名コール

コロネの得意技影分身。コロネが次々と分身して10人ほどに分裂。そしてそれぞれがさまざまな方向に散らばり、クナイや巨大な手裏剣などをかまえ……一斉攻撃！

空中から、真正面から、左右からクナイや手裏剣などが集中的に浴びせられる

だがそのどれもが鱗にはじかれ傷一つ付けられていない

「うそでしょ……!!」

「うおりゃああああ」

リサが両剣を構え

龍の攻撃をよけて……

足に向かって猛烈な連続攻撃を放つ

剣が視覚では認知できない速さで動いているのか剣がかすんで見える。

龍の意識がリサに向けられた瞬間

「いでよ！魔剣ハルバード！」

「攻撃上昇スキル発動！」

ゴオオオオオオオとマカロニさんを待とうオーラの濃さが跳ね上がっていき

マカロニさんの腕に巨大なハルバード

2メートルちよいあるあの剣は単体攻撃専用で、魔力を注ぐことで攻撃力が跳ね上がる

続いて技名コール「インパクトストライク！」

インパクトストライク。通常攻撃の10倍だっけ？とりあえずそこはかたく強い打撃攻撃のはずである。それに攻撃上昇スキルつかってるからきつと軽く尻餅くらい着くんじゃないかあの龍？

巨大なハルバードを高々と振りかぶり

龍の頭めがけて……

激突

そして二度目の炸裂音

だが今回はマカロニさんの攻撃によるものだ

そして続いて爆風

龍が衝撃に耐えきれず前足を着く

龍が立っていた場所を中心に放射線状に地面にヒビがはしり、小規模なクレータを作る

砂煙が舞い、マカロニさんが飛び下がり、コロネもリサも戻ってくる

砂煙が張れ……そこに現れた龍の頭の鱗にヒビが入っていた。

グギユウウウウウウウ

龍がぶちぎれたとばかりの咆哮を吐きだす

なるほど、つまりあのヒビが入っている場所がいま一番もろい

そこを集中攻撃すれば……

「マカロニさん！リサ！」

「そうだね」

「おっけい！」

どうやらアイコンタクトで理解できたらしい。

しびれを切らしたように龍がものすごい速さで突進してきた

「重力魔法グラビトン！」

オレの重力魔法グラビトンは相手にかかる重力を増やし、動きを制限するというものだ

龍は攻撃主がホタリンだときずくと、固まった姿勢のままブレスを
はく

すかさずアルスが盾で防ぐ

そしてマカロニさんが技名を叫ぶ

「範囲攻撃上昇スキル発動！」

これでマカロニ含むトリサの攻撃力が飛躍的に上昇

ついでリサの攻撃

「双剣使スキル 百烈斬！」

やく5秒間で100ちよつとの斬撃を放ち龍の頭部に命中する

よし、頭部の鱗がもうほとんどついてないうえに血が滴っている

いける！

そしてマカロニさんがハルバードを肩に担ぎ

「ジャツジメント……」

マカロニさんが技名をしゃべりながらジャンプし……

もはや鱗がはがれ血まみれの龍の頭へ

「インパクト！」

大爆発にもいた衝撃がオレの身体を虫ケラのようにふきとばす

砂煙が張れ、そこにいたのは

ハルバードを振りおろした後のようなマカロニさんと そこに立つ龍

静寂。

スウッと龍の頭から縦にラインがはしり

全身から血を吹き出しながら無数のポリゴン状となって消えていった……。

「よっしやあああ！」

「やったわ！」

「イエーーーーー！」

「あはは、かつちゃったね」

「……………」

いやー一時は死ぬかと思ったぜ

オレは皆とハイタッチしているところで、さっきの老人がきた

「なるほど……つむ、よろしい。ではむじつにある門をくぐるがい。」

オレたちは門をくぐりぬけた。

中の部屋はさっきの部屋のように広くなく、そこらへんの学校の教室よりちょっとせまいくらいの広さ

その部屋の中心の空中に停滞し、なおもゆらめきながら輝く光

転送ゲートみたいだな

このセカンドワールドというゲームには転生ゲートというものがあり、

街の中央やダンジョンのボス部屋の後などにあり、街に戻ることができるうえ、他の街にも行けるとい

非常に便利なしろものである

でもこの転生ゲートの輝きかたハンパな

まぶしいって

「最初の輝きはこれね」

コロネがいう。なるほど

そしてオレ達5人は順番に光の中へと飛び込んで行った

そしてそこで意識が途切れる

回想終了

「あーなるほど、老人の言ってた新しい世界って別世界のことか？」

「コロネに問う。

「やっぱりそうなるよね……」

「もう意味わかんないわよ！」

「まあ落ち着けてオイ」

グシッ

「いやだから痛いってー！」

「とりあえずはやく仲間と合流しなきゃ……」

そういうわけで、適当に森をさまようホタリンとコロネであった。

終わる日常（後書き）

誤字脱字訂正しました

私達の初日(前書き)

とりあえずこの2人から始めます

私達の初日

「あー、なんか迷ったっぽいな。オレら」

となりでのんきなことをいつてるバカはホタリン

赤髪で全体的に長く、前髪は左右に分けているが右目が隠れて見えない

最初はチャライ印象を受けたがそうでもない

まあ、どーでもいいけど。

っていつかのんきすぎるでしょ！

「もぉー疲れたわよ…。なんとかしなさい」

「できたらしてるって」

はあ…

ほんとほこいッ面白がってない？

「そついえばちあ」

「なによもつ」

どうせロクでもないことだろうと私は思った

「腹、へっつてない？」

あー、そういえば私昼飯抜いたんだっけ

「まあ、それなりに……」

「なんかさー、この森結構深いと思うんだよ。食料調達とかしたほうがいいよね？」

うわー。

なんかすごい軽いノリみたいな雰囲気であと数日かかんじゃねみたいなこといつてる……。

でも、それもそうだ。

もしかしたらそれくらいかかるかもしれない

「そうね……。どこかに食べ物……」

周りをきよろきよろしながら歩いていると草村からイノシシのようなモンスターがでてきた

なんか、気持ち悪い……

皮膚の色が紫なところがまた……これは無理ね

絶対まずそ……

「おお、うまそうなヤツ！」

え？

「え、まさかあんたアレ食べるつもり!？」

「おう ファイヤー！」

イノシシもどきが炎に包まれて

……灰と化した。

……。

「やべ火力しくった。」

「なにやってんのよ!」

ホタリンの頭を殴る

ベシッ

「ちよ、いてえって。なに？もはや癖にでもなってる?」

となりで何か言ってる気がするけど無視する

はあーもう、次出たら私がしとめよう

そんなことを思っていると2回目のエンカウント

「お、発見!」

さっきの失敗など忘れたかのようなホタリンのテンションに半ばあきれつつ

「こんどは私がやるから」

獲物にクナイを投げる

今回もイノシシのようなヤツで、おそらく頭が弱点だろう。そう思
って額を狙う。

額に吸い込まれるようにクナイが突き刺さり ドビュシヤ!という
少々むごたらしい音と血しぶきがとびちり、その場に倒れる

「うおー、こえー」

べっつ

「とりあえず、なんかもう暗いからそこから入んで寝ようぜ」

ふと空を見上げる

みあげた空はいつのまにかそろそろ夜を迎えようとしている。

すこし開けた場所に移動するホタリン

「ここら入んでいいか。」

と、いいながらさっきのイノシシを木の枝を器用に組み立てて火あ
ぶりにしながらいう

準備はやつ！

そして落ち着きすぎでしょ！

え？何？実際森で迷ったことでもあんの？

昔からだけどホタリンはマイペースすぎると思う。

「お、うまそうじゃね？塩がほしいよなー。……うお、うめえ！」

とか思考を巡らせているとホタリンがそういつつつ肉をほおばるホタリン

私も食べる

「お……おいしい。」

「だろ？オレ才能あるかもしれない」

丸焼きに才能もなにもないと思うんだけど……

「てゆうかさー、オレら本当に別世界ってやつに来たのかな」

食事中にホタリンが独り言のように呟く

「わからないわよ。でも、それが一番納得できるわ」

「オレさー、実は楽しいんだ」

え？

「いやほら、むこうじゃ学校でも友達あんまりいないし、勉強もめんどくさいし、毎日帰り道にあー別世界とかいきたいなーとか思ってたさー」

なんか、意外だった。

ホタリンの性格上むこうでもエンジョイしてそうな感じだったけど

「まあオレとしては一日の楽しみがネットゲームをしてる時くらいだったんだよ。でも今はちがうだろ？こっちには親友がいるし、戦えるし、だから、今もお前といれて楽しいぜ」

なんか恥ずかしいな…

べ、別に嬉しいとか思ってないわよ？

「どうした？ほっぺが赤いぜ？」

「も、もとからよ！」

がしっ

「痛いっ！」

でも、それは私も似たようなものかな

わたしことコロネは中学生のころ仲間外れにされて自室に引きこもる毎日を送っていた。

毎日毎日のように自室にこもり続け、ネットゲームでひたすら敵軍を薙ぎ払い続けた。

ずっと単独狩りをしていて、レベルもプレイヤースキルも上達し、スキルも強くなっていき、まるで廃人プレイヤーのようだった。

ってというか廃人だったな私。

そんなぼっちプレイを続けていたある日、私にPT勧誘の声がかかった。

それがほたりんだった。

当時のイベントでボスが強いと聞いたが、おそらくそれだろう

私もソロでは倒せなかったのでPTすることにしたのだが、その日から毎日が楽しくなっていったのである。

「おい、どーしたばーっとして。熱でもあんのか？」

と、一人昔の記憶を懐かしんでいたら突然そんな声とともに額に手がのびてくる

「ばかっ ないわよ」

伸びてくる手を払いのける

「ああ、なら別にいいんだけどね」

そう話してるうちにだんだん意識が睡魔に支配されてくる

「あー、そろそろ眠くなってきたな」

「そうね」

「んじゃ、寝るわ。オヤスミ……」

そついい彼は上半身を木に預けた姿勢で寝てしまった。

私も寝るかな……

普通なら知らない森で布団もないのに寝るなんてできるものではないな
かったが

この時ばかりは心地よく眠ることができた。

「神様、本当によろしいのですか？あのもの達で」

「いいんじゃないよ。おぬしも映像は見たであろうっ？」

「ええ」

「あの龍はむこうの世界でS級に属するドラゴンじゃ。つまりトゥッ
ブクラス。大丈夫、彼らならきつとやってくれるじゃろ」

「だと、いいんですけど……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7753y/>

暇な世界にさようなら

2011年11月24日01時03分発行